対に3のアクセントで発音しなければならない最重要基礎単語であったのだ。

「ええか、〈まいど〉は、〈おいど〉と同じや。言うてみい。〈まいど、おいど、まいど、おいど、まいど、おいど〉。どや?」

と、私は先輩に教育を受けた。しかし、私は、結局、最後まで「まいど」と言うことができなかった。「まいど」と言ってしまったが最後、自分が自分でなくなるような、大阪に屈服させられるような、そんな気がしたのだ。それに、何よりも「まいど」という発音のあり方が、私には恥ずかしくてならなかったのだ。

意を決して「まいど」で得意先を訪れたことも何回かある。が、そういう日の夜、私は、必ず望郷の念に襲われた。

かように、アクセントというのは馬鹿にならない。なぜなら、それは、言葉そのものが持っている意味よりも、もっと微妙な意味を含んでいる場合があるからだ。

たとえば、我々は仲間内でしゃべる時などに、よく言葉を言い替えて使う。新宿を「ジュク」と言ってみたり、BMWを「ビーエム」と呼んだり、「高橋さん」を「ゲーハ」と呼んだりするのがそれだ。また、広告屋は、便所を「サニタリールーム」と呼んだり、借金生活でしかないものを「クレジットライフ」と言い替えていたりする。そうすることによって、たぶん彼らは、新味を出そうとしたり、真相を隠そうとしたり、仲間意識を強調しようとしているのだ。

アクセントの言い替えも同じような効果を狙ったものだ。しかし、それは、言葉の言い替えよりもさらに微妙な感情を反映している。

たとえば、今から十数年前、「サーファー」という風俗が現れはじめた頃、人々はこの言葉を「オーバー」や「コーナー」と同じように、頭アクセントで発音していた。

ところが、単なるファッションでサーファーをやっているのではない、実際にサーフィンをやる本物のサーファーたちは、自分たちを「サーファー」と、「登校」「象徴」と同じ平板アクセントで呼んで区別していた。

現在、サーファーのアクセントは後者に統一されているようだが、ともかく、この言葉が一般化するまでには、こうした事情があったのである。

「ハッカー」についても、似たようなことが起こっている。一般人は「ハッカー」を、頭アクセントで発音しているが、ハッカー自身は、自分たちを「ハッカー」と、平板アクセントで呼んでいるのだ。きっと彼らは、世間から決めつけられているイメージに反抗するために、アクセントを変えているのだろう。

あっ、恵比寿の話を全然していないうちに終わってしまった・・・・絶句・・・・。

Illustration. Takeuchi Kazuya

山手線膝栗毛

テクニカルライター
小田嶋 隆

私は恵比寿には生まれてこの方１度しか行ったことがない。
実をいうと恵比寿を正しく
発音することすらできない。

恵比寿

「えびす」のアクセントはどこにある?

恵比寿は・・・

と、書きはじめて、私は、それっきり、20分ほど、絶句している。

・・ううむ・・・・・・・・・・ううむううむ・・・・・・・・・・